

放射線科医の仕事

放射線科 副部長
杉山 浩一

放射線科医？

「放射線科医」と聞いても、普段どんな仕事をしているのかわからない方が多いのではないかと思います。放射線科医の主な仕事として、

- ・他科の先生方からの依頼で撮影されたCTやMRIなどの画像から病気の診断をする画像診断
- ・X線透視を用い、血管撮影などの手技を利用した治療術(IVR=Interventional Radiology)などを行っています。

また、診断や治療に超音波検査を利用することもあります。

当院では、**放射線診断部門(画像診断、IVR)**を専門にしています。

各種機器で撮像された画像から、異常所見を拾い上げ、どのような性質でどのように広がっているかなどを丹念に読み取り、どの病気が最も考えられ、他に考えられる疾患は何かなどの鑑別診断を行っています。

放射線診断で主に扱っているCT・MRI検査について

CT(computed tomography)検査

回転するX線管が存在する筒の中を専用の寝台で通過し、検出器で得られたデータをコンピューターで計算処理をして体の断層像を作成します。

<CT検査の特徴>

広い部位の撮像範囲でも検査時間が短い。

細部の分解能に優れている。

撮影部位や検査内容に応じ、データ解析によって様々な断面の画像作成ができる。

血管情報(CT angiography)を得たり、3次元的な立体画像(3D)による観察が可能。

肺疾患、脳・頭頸部、腹部・骨盤部病変などはもちろんのこと、甲状腺や唾液腺などの表在部や、骨軟部・関節などまで様々な部位で使用される。

CTによる透視を用いて、身体の奥にある病変の組織を採取したり、膿を取り除くチューブを挿入する処置を施すことも可能。

MRI(magnetic resonance imaging)検査

大きな円筒型の磁石に入り、強い磁気の中で電波を体に加えると体内の水素原子が共鳴し、そこから発生した微弱な電波を受信してコンピューターで計算処理することで体の断層像を得ています。

<MRI検査の特徴>

X線による被曝がない。

骨や空気による影響がないため、脳、脊髄、骨関節などを鮮明に診断できる。

→脳外科領域(梗塞、脳腫瘍など)や整形外科領域(ヘルニア、脊柱管狭窄症など)によく使われる。

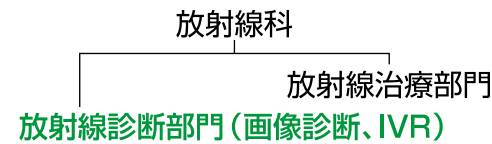
造影剤を使わなくても、血管情報が用意に得られ(MR angiography)、脳血管検査等によく用いられる。

縦、横、斜めなどの他方向の断面が得られる。

組織コントラストが良い。

病変の性質が理解しやすく、CTで病変が検出された後、次の精査に用いられることも多い。

CTおよびMRI検査とも、状況に応じて造影剤による造影検査を行います。これにより画像のコントラストがさらにはっきりし、病気の有無だけでなく、病気の組織や進行状況なども詳しくわかるようになります。

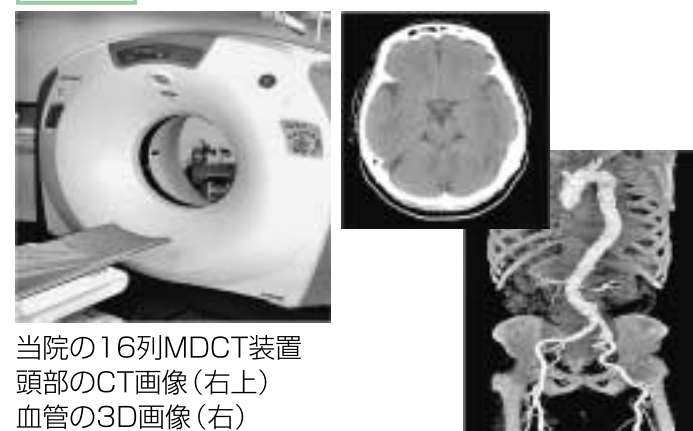


画像診断(読影)の様子



IVRの様子

CT検査 X線を使った検査です。



当院の16列MDCT装置
頭部のCT画像(右上)
血管の3D画像(右)

MRI検査 磁気を用いた検査です。

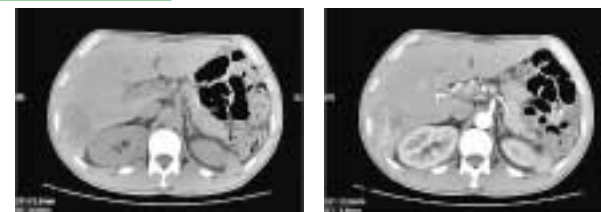


頭部血管のMRI画像



腰椎のMRI画像

造影剤の効果



腹部のCT画像 造影剤使用前(左)と使用後(右)

サービス向上 委員会より

私たち委員会では、病院を利用される患者さまが満足していただけるよう、職員の接遇向上や院内の環境整備を目的に活動しています。

患者さまより『受付の会計をする時に杖の置き場が無いので、杖が倒れてしまいいなかなか拾うことが出来ない』というご意見をいただき、受付に杖置き場を設置しました。また、『B棟の出入り口に傘立てが無く、不便で傘が乱雑になっている』というご意見も頂き、傘立てを設置しました。患者さまのお声に職員一同、自分たちではなかなか気がつかない点に気づかせていただく事も多く、大変感謝しております。

今後も地域の皆さんに利用される病院であるために患者さまに、ご意見をいただいてよりよい病院にしていこうと思って活動しています。



毎年恒例のクリスマスの飾り付けをしました。
B棟地下1階の渡り廊下にクリスマスツリーの飾り付けをしましたので是非、ご覧ください。

(文責:看護課長 川口 登喜子)